

# 二 中 の 木

学校報  
第5号  
H27/06/12



能代市立  
能代第二中学校  
TEL52-5138

## 諦めない気持ちがある限り！ 〜夏季総体予選大会に寄せて2〜

これからするお話は、平成三年当時、大館市立下川沿中学校に勤務されていた遠藤元博先生（現 北秋田市学校教育課長）が道徳資料として書かれたものを私なりの表現を加えながら編集したものです。このお話に登場する人物や出来事は実在した方々であり、現実起こった出来事です。

### 全国大会決勝へ

昭和四十六年八月、東京都代々木のオリンピック体育館は、たくさんのお客様によりあたたかき地鳴に突き動かされているようだった。食い入るように見つめる観客の視線は、中央コートに注がれていた。我が下川沿中学校女子バレーボール部は、第一回全国中学校女子6人制バレーボール大会決勝をその中央コートで戦っていたのだ。

決勝戦第一セットは、石川らの好ブロックなどで激しく追いついたものの、2ポイント差で失っていた。第二セットも相手の勢いは止まらず、マッチポイントを握られてしまい、絶体絶命のピンチの只中であつた。

### 苦しい練習から

そんな状況にあつても、「負けるはずがない。負ける訳にはいかない。」という、選手達の立ち向かう気持ちの炎は勢いを失うどころか、益々燃え上がっていった。白熱した試合の様子とは裏腹に、冷静に気持ちを落ち着けながら、選手たちは三年間のあの苦しい練習を思い出していた。

皆さんは、東洋の魔女と呼ばれた全日本バレーボール女子チームが、東京オリンピックで見事に優勝したことを知っているだろうか。

当時、下川沿中学校女子バレーボールチームは、東洋の魔女の監督で、「鬼の大松」と恐れられた大松博文氏が考案した練習メニューとほぼ同様の練習を繰り返していた。逆立ち体育館一周、天井までのロープ登り、いつ終わるともしれない果てしないランニング・・・。五百回のパス練習では、肩の感覚がなくなり腕が上がらなくなる。しかし、落としてしまえばまたはじめから五百回のパス練習が待っている。

### 苦境からの脱出

ある冬の日の練習では、あまりの空気の冷たさに指先の感覚がなくなり、思わずボケットに手を突っ込んでしまう部員がいた。それを監督が見逃すことはなかった。部員全員が両手に雪玉を握らせ、体育館二〇周を命じたのである。

練習場所だった体育館も、決して恵まれた環境とは言えなかった。天井までの高さは、今の体育館のおよそ半分。照明と言え、間に合わせにいくつかの電球がぶら下げられているだけだった。そんな狭く薄暗い中を来る日も来る日もボールを追いかけた。泣きながら必死に追いかけた。一つのプレーが完璧にできるまで、練習はいつ終わることも知れず続いたのである。



あの苦しい練習を思い出した選手の手からは、応援席からもはっきりと見て取れるほどに、闘志の炎が燃え立っていた。

ここから下川沿中学校の猛反撃が始まった。第二セットをジュースまで挽回し、ついにはセットをものにしフルセットへと持ち込んだのである。

第三セットは壮絶な戦いとなった。実力差はない。誰の目にも精神力の差が勝敗を分けるのだからと映っている。

### 必ず訪れるチャンス

た。選手一人一人が歯を食いしばり、まるでボールしか見えていないかのような夢中で追い、拾い、打った。練習の時のように・・・。

そして、とうとう優勝の瞬間は訪れた。最後は長崎の強烈なスパイクが、相手コートに突き刺さったのである。

その時、代々木体育館は揺れた。一層揺れた。下川沿中学校が掴み取った栄光に歓喜し、そして下川沿中学校が見せた、何があってもあきらめず立ち向かう、たくましい精神力への惜しみない拍手に、体育館は揺れたのである。



### 行け、二中！



栄冠は  
君の頭上に！

勝負を諦めず、勝ちを信じてさえいれば必ずチャンスは訪れる。相手も同じ人間。平等にチャンスもピンチも大なり小なり訪れる。その時、諦めてさえいなければ、相手のスキがおもしろいように見えてくる。さあ！今こそチャンスが訪れたのだ！